

## 「『公』を『私』すべからず」

手元に『都市の日本人』を書いたロナルド・ドーア氏が東京新聞・中日新聞に掲載したコラムをまとめた上記の書物がある。その「序にかえて」に次のような趣旨の文がある。

公と私。儒者が「公を私するものが国を滅ぼす」と唱えている。今日の「公を私する」風潮は、公益を私益に分解する制度的変化となり、国民の共有財産を個人に払い下げたり、公営の事業を私的な営利事業に変えたりするばかりでなく、同じ人生の諸危険にさらされている国民共有の保健・保険制度を弱者への隠れた再配分作用の要素が多すぎるから、自立自助と称して、なるべく営利事業化し小政府・弱政府の実現をはかるのが今様の「公を私する」発想である。もっとも、そういう発想をする人たちは「公と私」と言わないで、「官と民」という。「民尊官卑」は「私尊公卑」ということになり、利己心である。天皇制時代の「官」と民主主義時代の「官」は違い、「公益」は打ち捨てるべき概念ではない。その公益の認識を支える「社会の連帯意

識」も非常に大事だ。貧富の差が拡大していく社会では、その連帯性が蒸発する。市場主義者の唯一善—経済効率—よりも価値がある。

景観論争で有名な「国立(くにたち)マンション訴訟」は、東京都国立市で次々の建設される高層マンション建設で学園都市・国立のシンボルとして長年市民に親しまれてきた銀杏・桜の並木の風景が壊されることをめぐって争われ、「景観利益は法律上保護に値する利益に当る」と最高裁は判断した。かつて千里ニュータウンで、先住民が眺望権を主張して、高層の集合住宅の建設に反対する運動が展開されたことがある。城崎の外湯めぐりは有名だが、有馬のまちづくりも、それぞれの自社のホテル・旅館に囲い込むのではなく、街を回遊してもらう仕組みに工夫を凝らしている。大阪・梅田・キタのまちづくりが、これからも、迷路のような地下道を数多く抱えながら、超高層からの眺望を競うらしい。千里センターなき千里ニュータウン以上に奔放に資本の論理を貫徹させる、この地のエリアマネジメントを

誰が行なうのだろうか?と電車に乗れば13分の隣村の住民は思う。

「社会的共通資本」とは、一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々が、豊かな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的・安定的に維持することを可能にするような社会的装置を意味し、大気、森林、河川、水、土壌などの「自然環境」、道路、交通機関、上下水道、電力・ガスなどの「社会的インフラストラクチャー(都市基盤)」、そして教育、医療、司法、金融制度などの「制度資本」から成る。(『社会的共通資本』)これらが、どのように管理・運営されているか、税の配分、統制のあり方、公共事業のあり方、公の施設の建設・運用・廃止の方法。昨今の政治・経済の潮流を見るにつけ、考えさせられることしきりである。千里川の歩道を占拠して自転車を止める児童、道を譲っても挨拶もせずに通る自動車。放置し自動的に正せないならば、その仕組みづくりをどうするのが問われるとこころではないか?



「まちづくりニュース」は当社ホームページで第1号から最新号までご覧いただけます。 <http://www.tmconet.com/>

## 少子化と子育て支援

### 第31回 アイボリー・フォーラム

主催：豊中駅前まちづくり会社



講師 / 読売新聞大阪本社編集委員 小牧規子氏

日本の少子化傾向はとどまる気配がありません。今年発表された2009年の合計特殊出生率は1.37でした。このまま少子化が進むと、将来、現役世代1人で高齢者1人を支える「肩車型社会」になるとされています。なぜ、少子化が進むのでしょうか。子育て環境、とりわけ地域社会が大きく変化したためだと言われています。社会全体で子育てを支えるためにはまちづくりをはじめとした地域社会の再構築こそが重要なのです。

講師紹介：京都府生まれ。読売新聞社の豊中支局長、阪神支局長、社会部次長、生活情報部次長などを経て、2007年から編集委員。「よみうり子育て応援団」を担当している。

日時：2010年9月28日(火)  
午後6時半から  
場所：ホテルアイボリー  
参加費用：1,000円

※事前にお申し込みください  
参加申し込み：  
豊中駅前まちづくり会社  
TEL: 06 - 6858 - 6190